

五山文学における「和韻」について

— 絶海・義堂を中心に —

朝 倉 和

はじめに

「和韻」とは、特定の詩と同じ韻を用いて詩を作る方法を言う。わが国の五山文学作品には和韻詩が非常に多く、代表的な詩の総集である以心崇伝（一五六九—一六三三）他編【翰林五鳳集】では、巻第十一、十二は試筆和分韻、巻第二十六—三十一は雑和部となっている。それにも関わらず、管見の範囲では、この作詩法は、従来、あまり注目されていない。五山禅僧の作品を正しく読み解き、研究して行くためには、このような基本的な事柄が明らかにされてくなくてはならないと思われる。

本稿では、「五山文学の双璧」と称せられた絶海中津（一三三六—一四〇五）と義堂周信（一三三五—一三八）の作品類を通して、和韻詩の様相の一端を明らかにしてみたいと思う。義堂には【空華日用工夫略集】（以下、「日工集」と略す）という日記が残されている

ので、詠作状況を知る上で便利である。原詩（特に「本韻詩」と呼ぶ^②）が判明する場合は、和韻詩との、内容面での関係を考察する。また、和韻詩の作成が、五山文学にとつて、あるいは五山禅僧にとつて如何なる意味を持つか、も併せて考えてみたい。

一 「和韻」という作詩法

まず、本論に入る前に、「和韻」という作詩法について確認しておきたい。【文体明弁】（明・徐師曾撰）の「和韻詩」項に、つぎのような説明がなされている。

一三 和韻詩 按和韻詩有三體。一曰「依韻」、謂「同在」一韻中「而不_丙必用乙其字」也。二曰「次韻」、謂下和「其原韻」而先後次第皆因_{上レ}之也。三曰「用韻」、謂下用「其韻」而先後不_中必_上次也、如「韓愈（昌黎集）有丙（陸渾山火和）皇甫湜」用乙其韻_甲」是已。（湜詩今不_レ伝、故採「此詩」不_レ録。）古人庶和、

答「其來意」而已、初不_レ為_二韻所_レ縛。如_三高適贈_二杜甫_一云。「草_{（玄）}今已畢、此外更何言？」甫和_レ之則云。「草_{（玄）}吾豈敢？賦或似_二相如_一。」（中略）中唐以還、元、白、皮、陸更相唱和、由_レ是此體始盛、然皆不_レ及_二他作_一、嚴羽所謂「和韻最害_二人詩_一」者此也。今略採_二次韻詩_二篇_一、以備_二體_一、且著_二其說_一、使_二學者勿_レ效_レ尤云。（下略）

（「明詩話全編」肆、江蘇古籍出版社）

和韻詩には三種類ある。一つは本韻詩と同じ韻中の文字を用いるが、必ずしも本韻詩の文字を用いなくてもよい「依韻」、一つは本韻詩の文字およびその順序をそのまま用いなくてはならない「次韻」、残りの一つは本韻詩の文字を用いるが、必ずしもその順序通りに用いなくてもよい「用韻」である。元來、古人の庶和は、その來意に答えるのみで、初めは韻に縛られることはなかつた。中唐以降、元稹や白居易が互いに相唱和したことにより、この作詩法が始めて盛んになったという。しかし一方で、後世になると、詩人がいたずらにその出来映えを競い、その才能を誇るとして、この作詩法に対して批判的な意見も提起されるようになった。『文体明弁』中にもその一部（傍線部）が引用されていたが、宋の嚴羽が撰述した「滄浪詩話」には、以下のような記述がある。

和韻最害_二入詩_一。古人酬唱不_二次韻_一、此風始盛_二於元白皮陸_一。本朝諸賢、乃以_レ此而闢_レ工、遂至_二往復有_二八九和者_一。

（「滄浪詩話校釈」・詩評・四一、人民文学出版社）
翻つてわが国の五山文学作品に目を向けてみる。本稿を通じても気付かれると思うが、和韻詩の大半は「次韻」である。それは例えば、「韻ヲ用フ」とか「韻ニ依ル」、「韻ヲ借ル」と記されている、である。虎関師鍊（二二七八―一三四六）の「濟北集」巻第十一・詩話には、

楊誠齋曰。大抵詩之作也。興上也。賦次也。庶和不_レ得_レ已也。

（中略）至_二於庶和_一。則孰觸_レ之孰感_レ之孰題_レ之哉。人而已矣。出_二乎天_一猶懼_レ狀_二乎天_一。專_二乎我_一猶懼_レ強_二乎我_一。今牽_二乎人_一而已矣。尚冀其有_二一銖之天_一。一黍之我_一乎。蓋我未_二嘗觀_一是物。而逆追_レ彼之觀。我不_レ欲_レ用_二是韻_一。而抑從_レ彼之用。雖_二李杜_一能_レ之乎。而李杜不_レ為_レ也。是故李杜之集無_二牽率之句_一。而元白有_二和韻之作_一。詩至_二和韻_一而詩始大壞矣。故韓子若以_二和韻_一為_二詩之大戒_一。此書佳矣。然不_レ必皆然_一矣。夫詩者志之所_レ之也。性情也。雅正也。若_二其形_一語言也。或性情也。或雅正也者雖_二賦和_一上也。或不_二性情_一也。不_二雅正_一也。雖_レ興次也。（中略）又李杜無_二和韻_一。元白有_二和韻_一而詩大壞者非也。夫人有_二上才_一焉。有_二下才_一焉。李杜者上才也。李杜若有_二和韻_一其詩又必善矣。李杜世無_二和韻_一。故庶和之美惡不_レ見矣。元白下才也。始作_二和韻_一不_レ必和韻而詩壞_一矣。只其下才之所_レ為_レ也。故其集中雖_二興感之作_一皆不_レ

及「杜李」。何特至「庶和」責レ之乎。(下略)

【五山文学全集】第一卷

という文章がある。楊万里(楊誠意)や韓駒(韓子蒼)の、「和韻」に対する批判的な言が引用されているものの、詩は志の之く所であつて、「賦」や「和」であつても、性情や雅正が表われていたら「上」である(性情や雅正が表われていなかったら、「興」であつても「次」である)、元稹や白居易は「下才」だから和韻詩が芳しくなかつた(「上才」の杜甫・李白に和韻詩があつたら傑作に違いない)、と虎関は(苦しい)フォローをしている。どうして和韻詩は、五山禪僧の間でもはやされたのだろうか！

二 絶海・義堂の和韻状況

絶海および義堂の和韻状況を見てみる。

○絶海中津【蕉堅藜】⁵⁾

- ・ 五言律詩他(計三〇首、他作四首を含む) ……三首(すべて他作)
- ・ 七言律詩(計六七首) ……二首
- ・ 五言絶句他(計二〇首) ……一首
- ・ 七言絶句(計五五首、他作三首を含む) ……一四首(他作三首を含む)

○絶海中津【絶海和尚語録】(以下、「絶海録」と略す)

- ・ 偈頌(計二二〇首、他作一首を含む) ……三六首(他作一首を含む)

○義堂周信【空華集】⁵⁾

- ・ 卷第一
 - ・ 古詩(計七首) ……二首
 - ・ 歌(計三首) ……一首
 - ・ 楚辭(計一首) ……ナシ
 - ・ 四言(計一七首) ……ナシ
 - ・ 五言絶句(計五六首) ……一首
 - ・ 六言絶句(計一首) ……一首
 - ・ 七言絶句(計一三三首) ……六一首
- ・ 卷第二
 - ☆ 七言絶句(計二〇九首) ……一一一首
- ・ 卷第三
 - ☆ 七言絶句(計二二三首) ……一〇七首
- ・ 卷第四
 - ・ 七言絶句(計二三六首) ……五六首
- ・ 卷第五
 - ・ 七言絶句(計二一四首、四首は他作か) ……六七首
- ・ 卷第六
 - ☆ 五言八句(計一九三首) ……一三八首
 - ☆ 五言排律(計二首) ……二首
- ・ 卷第七

☆七言八句（計一七〇首）…一四四首

・卷第八

☆七言八句（計一八〇首）…一四七首

・卷第九

☆七言八句（計一五一首、他作三首を含む）…八五首（他作二首を含む）

首を含む）

・卷第十

・七言八句（計一〇〇首）…三六首

・七言排律（計一首）…ナシ

【注】☆印は五割以上が和韻詩であることを示す。なお、和韻

詩の総数は、現段階で把握し得るものであつて、今後の調査により変動する可能性がある。本来ならば、本韻詩と逐一、照合するのが望ましいが、散佚している場合が殆どで、数値は目安程度に考えていただきたい。

絶海の詩作品は「蕉堅藁」、偈頌作品は「絶海録」に収められている。前者は総数一七二首中四〇首（約二三・三%）、後者は総数一二〇首中三六首（三〇・〇%）が和韻詩である。義堂の詩（偈頌）作品は「空華集」に収録されており、総数一八九六首中、和韻詩は九五八首（約五〇・五%）である。義堂の詩の半数が和韻詩であることが注目される。

三 絶海・義堂の和韻詩の詠作状況

先に結論から述べると、絶海と義堂の和韻詩を概観すると、その詠作状況は、(I) 贈答・唱和にもなつて詠作する場合と、(II) 本韻詩が契機となつて詠作する場合とに大きく分類される。さらに(II)は、(a) 本韻詩が中国の詩人のもの、(b) 本韻詩が先輩僧のもの、(c) 本韻詩が自身の旧作、の三つの場合に分けられる。以下、具体的に各々の用例を見て行くことにする。なお、「本韻詩」項には当該詩の本韻詩、「参照」項には当該詩と同じ韻字が用いられている詩をそれぞれ掲げた。傍線、文字囲、番号等は私に施した。

(I) 贈答・唱和にもなつて詠作する場合

① 「蕉堅藁」

一 呈真寂竹菴和尚

不_レ堪_二長仰止_一。渚上寄_二高園_一。流水寒山路。深雲古寺園。
香花_レ嚴_二法会_一。冰雪老_二禪窟_一。重獲_レ露_二真菓_一。多生慶_二此_一。

一 A 和

豫章老謬懷渭

絶海威主力究_二本參_一。禪燕之餘間事_二吟詠_一。吐_レ語_二輒奇_一。
予_レ歸_二老真寂_一。特_レ枉_二存慰_一。將_レ遊_二江東_一。留_レ詩_二為_レ
別。有_レ曰。流水寒山路。深雲古寺鐘。氣格音韻。居然玄

勝。当レ不レ愧ニ作者一。予老矣。無ニ能為一也。不レ覺有下媿ニ後生一之歎上。遂次レ韻用答。誠所謂珠玉在レ側。不三自知ニ其形穢一也。

三韓辭ニ海国一。五竺訪ニ靈隱一。洗レ釜龍河水。燒レ香鸞嶺。安居全ニ道力一。段食長ニ齋窟一。特枉留レ詩別。何時定ニ再圖一。

一 B 洪武六年。歲在ニ癸丑一。冬十二月廿日。書ニ真寂山中一。豫章蒲菴來復

東遊ニ吳越寺一。雲水寄ニ行圖一。晴曬花間衲。寒吟月下圖。鴻飛誇ニ健翻一。鶴瘦識ニ清窟一。別去滄洲隔。博桑幾日圖。

一 C 延陵夷簡

絕海藏主。嘗依ニ今龍河全室宗主一。於ニ中天竺室中一參一究禪学一。暇則工於為レ詩。又得ニ楷法於西丘竹菴禪師一。故出レ語下筆。俱有ニ準度一。將丁遊ニ上国一。觀内人物衣冠之盛。与乙夫吾宗碩德禪林之衆甲。有レ詩留レ別竹菴一。菴喜而和之。茲承レ見示。復徵ニ於予一。遂次レ韻一首。奉ニ答雅意ニ云。

問レ道金陵去。因求ニ勝地圖一。光飛舍利塔。声動景陽圖。燕皇懷ニ王榭一。鷹巢謁ニ鏡窟一。龍河禪席盛。聖代喜ニ遭圖一。

【注】「竹菴和尚」「懷渭」とは清遠懷渭、「蒲菴來復」とは見心來復、「夷簡」とは易道夷簡、「全室宗主」とは季潭宗洵。

②「蕉堅菓」

八〇 応レ制賦ニ三山一

熊野峰前徐福圖。滿山菓草雨餘圖。只今海上波濤穩。万里好風須ニ早圖一。

八〇A 御製賜レ和 大明太祖高皇帝

熊野峯高血食圖。松根琥珀也応レ圖。当年徐福求ニ仙菓一。直到ニ如今一更不レ圖。

【注】「高皇帝」とは洪武帝（朱元璋）。

③「空華集」卷第四

觀中寄ニ示南陽艸廬圖詩一。予読レ之忽憶。昔觀中訪ニ予南

陽旧業一過レ冬。煨レ芋戲擬ニ老坡榭笙一。作ニ芋筍詩一。今觀

中在レ里子糜官寺一。屢乞レ退未レ許。有レ感次レ韻ニ一首謝ニ

觀中一曰。

披レ圖想レ聽ニ臥龍圖一。艸舍天寒雨雪圖。一出聊酬ニ三顧重一。

英雄割拠本無圖。

新詩読了一長圖。旧隱南陽落葉圖。尚記三冬風雪夜。蹲鴟撥出

地爐圖。

【注】「觀中」とは觀中中諦。

【本韻詩】「青嶂集」（觀中中諦著）

九七 南陽艸廬圖

隴畝夕陽梁甫吟。中原消息亂雲圍。輟レ耕初起髮如雪。不レ
愧二对郎鼎峙一。

〔梶谷宗忍氏「觀中録 青嶂集」、相国寺、昭四八〕

④ 〔空華集〕卷第九

奉レ呈二准后大相公一

幾年林下望二雲圍一。今夕那期辱見レ。東閣華筵披二宿霧一。
西園琪樹戰二涼圍一。座間天近蓬萊闕。簷際秋高河漢圍。慙我
疎才非二賦鼎一。謾聯二拙句一答二瑤圍一。

答二管翰林學士見レ和

翰林珠玉下二青圍一。喚二起吟魂一不レ待レ。工部逸才詩似レ
史。謫仙豪氣筆凌レ。送迎每見雲隨レ馬。來往時愁水斷レ。圍。
心三是交情無二貴賤一。武夫勿レ怪厠二珥圍一。

〔注〕「准后大相公」とは二条良基、「管翰林學士」とは東坊城
秀長。

〔參照〕「日工集」康曆二年（一三八〇）八月十四日条

十四日、二條殿使下菅秀長送二一緘一來上、其詩叙曰、謹依二來
韻一、奉二答建仁義堂和尚座右一、致二日外垂訪之謝二云、

老禪昂氣自籠レ。甚喜來遊心二我圍一、雅韻驚レ人歌二白雪一、
霏談洗レ耳起二清圍一、閨河曾隔幾千里、雲月今隣第五圍、何

日得二過二方丈室一、重聽内新句戛乙琅函甲、（下略）

⑤ 〔蕉豎藁〕・「宝冠精舍次二韻大亨西堂見レ訪」（九九）

⑥ 〔蕉豎藁〕・「次二允修小生歲旦韻二」（二二七）

⑦ 〔絶海録〕卷下・「和レ韻謝二天寧天倫禪師上竺二菴講師過訪二
（二七六）

〔參照〕「青嶂集」・「和二天倫和尚韻二」（二二二）

⑧ 〔絶海録〕卷下・「將レ往二近原一。次レ韻奉レ別二元章和尚一
（三首）」（二八三）

⑨ 〔空華集〕卷第二・「素中上人所レ藏錢舜举自贊牡丹芙蓉梅竹
同幅之画蓋天下絶品也。子欲二借一觀一。上人戲レ予曰。子若和二
吾詩一当二以レ画為二報也。喜不二自勝一。連和二章一。幸勿レ
食レ言云レ爾」（二首）

〔本韻詩〕「空華集」卷第二・「觀二諸友淵明采レ菊圖詩卷一戲
題二其尾二

⑩ 〔空華集〕卷第三・「次レ韻悼二大喜和尚一三首」

⑪ 〔空華集〕卷第七・「器之威主豈二和三三首一見レ寄。意在二以レ文

挑レ戦。予倒レ旌而退。復和「三首」以納レ款云「三首」

「本韻詩」「空華集」卷第七・「和レ韻答」古庭訓藏主」、「次レ

韻再酬」古庭」、「次レ韻答」義田了藏主」等

「参照」「空華集」卷第七・「黃梅塔下值レ雪有レ懷寄」古庭」。

兼簡「諸友」以促レ駕云、「和」答瓊叟瓊藏主」以述「普遊之
情」、「和」酬古庭見レ索「先師之語」等

⑫「空華集」卷第八・「寄」答京城諸友」各次「來韻」「六首」

⑬「空華集」卷第八・「次レ韻賀」石室住」建長」

⑭「空華集」卷第九・「次レ韻戲謝」無外袖」茶見」レ訪」

⑮「空華集」卷第十・「次レ韻答」明室」并叙」

序文に「明室侍者家世天潢。年少性最敏。昨於「慈聖老人筵
中」。和「余茶鼎詩唐律八句者」。食頃而成。時觀者如堵。咸
駭歎曰。未曾有也。余老且遲鈍。不レ勝「健漢」。重用「前韻」
為レ詩張レ之而自嘲云」とある。

「本韻詩」「空華集」卷第十・「某蓄」小茶鼎」。寔今左丞相源
君所レ賜。珍愛之佳器也。願「余陋室」。雖「欲」私藏「可」レ得哉。

遂送上「慈聖龍湫和尚」。少補「客筵茗具之闕」云、「龍翁和」

前偈。且以レ鼎見レ還復和再獻」

①④は詩の全文、⑤⑮は詩題と序文のみを掲げた。詩の贈答
や唱和は、複数の禅僧間（時に公家も含む）で行われるのが一般的
なので、本韻詩が複数あったり、自身の作だったりする場合もある。
まずは②、「蕉堅菓」からの引用である。この二首の詠出経緯
は、「仏智広照浄印翊聖国師年譜」（以下、「仏智年譜」と略す）永
和二年（一三三六）条で知ることができる。

永和二年丙辰。師四十一歳。大明洪武九年春正月。太祖高皇帝
召「見英武楼」。問以「法要」。奏对称レ旨。又召至「板房」。指「
日本図」。顧問「海邦遺跡熊野古祠」。勅賦レ詩。詩曰。熊野峯
前云云。御製賜レ和曰。熊野」。又賜以「僧伽梨・鉢多羅・茶
褐扱・櫛栗杖・并宝鈔若干」。詔許レ還レ国云云。（下略）

〔大正新修大藏經〕第八十卷）

これによると、絶海は永和二年（洪武九年）、四十一歳の時に、高
皇帝（一三三六）に金陵（南京）の英武楼に招かれて、法要を
問われ、その答えは皇帝の気に入るものであった。また、皇帝に書
籍の部屋に招かれて、日本の地図を指しながら熊野の古祠を尋ねら
れ、勅命によって熊野三山（熊野三社、本宮・新宮・那智）の詩
（八十番詩）を賦すと、御製の和（八十番詩A）を賜った。また、
皇帝からたくさんのご褒美（僧伽梨等）をいただき、日本に帰るこ

とを許されたという。

再び②に戻る。「御製の和を賜ふ」とあるが、両詩とも一、二、四句目の韻字が「祠」「肥」「帰」なので、八十番詩Aは、八十番詩に次韻していると言えよう。韻字に注目しながら、少し内容面に目を向けてみる。「徐福」は始皇帝の命令で、童男童女を率いて海上に入り、不老長寿の仙薬を求めたが、その後行方不明になり、熊野に到着したという伝説もある。両詩はこのことを踏まえている。まずは一句目。絶海が「熊野の峰前、徐福の祠」と詠じているのに対して、「祠」を韻字に用いなくてはならない高皇帝は「熊野の峰高し、血食の祠」と詠じ、ともに徐福の祠を詠じている。続いて二句目は、絶海は「満山の薬草」、高皇帝は「松根の琥珀」がそれぞれ「肥」えると詠じている。四句目の韻字は「帰」であるが、高皇帝は「不帰」と用いており、三句目から四句目にかけて、その昔、徐福は仙薬を求めたが、今に至るまで帰って来ない、と詠んでいる。対する絶海は、只今（天子の御威徳で）海上は波が穏やかで、万里の好風を受けて、徐福は（仙薬を持って）早く帰って来るでしょう（わたしも早く帰国したい）、と詠んでいる。一方は希求を詠み、一方は現実を詠んでおり、好対照である。なお、この絶海と高皇帝のエピソードは、広く流布していたらしく、度々他の禪僧の詩文集や抄物（『補庵京華前集』『翰林葫蘆集』『中華若木詩抄』等）に指摘されている。

①は、序文や詩後の自注によると、洪武六年（応安六年、一三七三）十二月二十日、真寂山において、これから江東地方（金陵）へ赴かんとする絶海が、清遠懷習に留別詩を贈呈し、それに対して清遠、見心來復、易道夷簡がそれぞれ送別詩を唱和したことがわかる。絶海が「多生、此に逢ふを慶ぶ」（二）と、清遠に逢えた喜びを詠じているのに対して、清遠は「何れの時か再逢を定めん」（一A）と詠じ、再会を期している。見心も「搏桑、幾日か逢はん」（一B）と、日本での再会を望み、易道は「聖代、遭逢を喜ぶ」（一C）と、絶海に逢えたことを喜んでいる。③は義堂と観中中諦、④は義堂、二条良基（一三三〇～一三八）、東坊城秀長の詩の応酬であるが、いずれも内容面では、本韻詩と和韻詩がよく呼応していると思われる。③に関しては、徐庶が諸葛亮を臥竜と評したこと、劉備が三度、諸葛亮の草廬を訪れ、出廬を請うたことなど、使用されている故事まで呼応している（『三国志』諸葛亮伝、『蒙求』『孔明臥龍』、『諸葛願廬』参照）。

さて、これまでと少し視点を変え、「日工集」を見ることによつて、禪僧の日常生活における和韻詩の在り方を確認してみたい。永徳二年（一三八二）正月十一日、廿日条を挙げる。

區

十一日、晴、赴東光古劍之招、时会者玉堂・将作・土岐宮内少輔・山名民部、古劍出新年試筆七言八句詩、和者十九人、将作問金剛經四句偈等事、余略答之、又問曰、俗人可

得レ悟否、余曰、悟無_レ真俗_二、安有_レ不_レ悟之理_一哉、又曰、或云_レ不_レ悟如何、余曰、悟不悟、是什麼椀、只貴_二自默契_一耳、因拳_二莊子輪扁_一云々、

十二日、陰、和_二胡字八句_一、寄_二東光古劍_一、

十三日、雨、元章和_二余湯字_一、華字各_二一首_一見_レ呈、

十四日、雨歇而陰、午後晴、連_二和胡字三首_一、戲答_二古劍_一、

十五日、古劍復和_二胡字三首_一、余又和_二三首_一、是夜以_レ無_レ油故、戲及_二東壁隣光_一云々、

十六日、晴、不遷_二元章來賀_一、余与_二僧録_一、太清_二參_一下府_一、々

君出接、略賀而退、人事、銀劍_一腰_一・杉紙十刀、伴_二僧録_一抵_二通玄寺_一賀歲、尼長老母子三人々事、一襲十刀、余独先婦、与_二不遷_一・元章_一相看、不遷出_乙和_レ下余賀_一、首座_二君字_一上八句詩_甲、余

出_二胡字唱和之什_一、元章_一不遷写取而去、就_二于管領宅_一賀歲、人事、青磁爐瓶_一・一襲十刀、時令弟將作在焉、次過_二赤松宅_一、

他之不_レ面、

十七日、晴、大御所、次大方殿、次無等局賀歲、次建仁方丈_一、

諸塔巡覽賀、南禪蘭洲及古劍至、不_レ値、古劍復和_二胡字_一、留而去、余亦和者_二三首_一、

十八日、晴、府懺、請_二南禪長老蘭洲及僧九人_一、例也、余先

与_二蘭洲_一人事、十刀一襲、時古劍復至、戲話商_二權胡字和章_一、古劍又出_二昌普省_一母八句者_一、予和_レ之、予与_二古劍_一以_レ詩戲、

且云、足_レ成_二十偈_一而止可也、古劍拳_二旧作_一曰、塔前班竹今朝泪、壁上莓苔旧日詩、龍湫所_二歎伏_一也、

十九日、晴、作_レ詩寄_二謝雲門太清和尚送_一古尊宿録_一、小師宗儔侍者持來、故有_二香林抄底独雲門之句_一、

廿日、晴、太清和_二門字_一者_二三首_一、為_二南子_一也、古劍至、以_二胡字諸作_一、与_レ余講明、余改_二数十字_一、万里小路_一侍從中納言殿賀歲、話及_二旧年雷詩唱和_一、人事、十刀一襲、右京大夫殿_一・月心和尚來礼、

【注】「古劍」(十一日条)とは古劍妙快、「玉堂」(同上)とは

斯波義将、「将(匠)作」(同上)とは斯波義種、「土岐宮

内少輔」(同上)とは土岐詮直、「山名民部」(同上)とは

山名氏清、「元章」(十三日条)とは元章周郁、「不遷」(十

六日条)とは不遷法序、「僧録」(同上)とは春屋妙葩、「太

清」(同上)とは太清宗渭、「府君」(同上)とは足利義滿、

「尼長老」(同上)とは智泉聖通、「首座」(同上)とは鏡湖

以宗、「管領」(同上)とは斯波義将、「赤松」(同上)とは

赤松義則、「大御所」(十七日条)とは洪川幸子、「大方殿」

(同上)とは紀良子、「蘭洲」(同上)とは蘭洲良芳、「昌

普」(十八日条)とは天心昌普、「龍湫」(同上)とは龍湫

周沢、「宗儔侍者」(十九日条)とは友岩宗儔、「香林」(同

上)とは香林澄遠、「雲門」(同上)とは雲門文偃、「南子」

〔廿日条〕とは浦雲周南、「万里小路」(同上)とは万里小

路嗣房、「侍従中納言殿」(同上)とは三条西公時、「右京

大夫殿」(同上)とは細川頼元、「月心和尚」(同上)とは

月心慶円。

十一日、義堂は古劍妙快に招かれて、斯波義将(玉堂、一三五〇

一四二〇)や義種(将作)等と東光寺を訪れた。古劍は新年の試

筆七言八句詩を作り、その詩に唱和する者が十九人いた。翌十二

日、義堂は胡字八句に和韻して、古劍に寄せた。十四日にも胡字三

首に連和し、戯れに古劍に答えている。翌十五日には、古劍がまた

胡字に三首和すると、義堂もまた三首和した。この夜は油が無かつ

たので、「東光寺」に因んで、戯れに「東壁の隣光」という語句を

詩に詠み込んだという。十六日、不遷法序と元章周郁が義堂の許を

訪れ、一連の古劍との胡字の唱和詩を写し取って去って行った。十

七日には、古劍が胡字に和してその詩を残して去った後、義堂もま

た三首和している。そして十八日、古劍がまた義堂の許を訪れ、戯

れに胡字の唱和のことを話題に出したので、義堂は、古劍と詩を以

つて戦っている現状を省察し、「十偈を成すを足れりとして止むれ

ば可なり」と言つて、一連の詩の応酬(詩戦)に終止符を打つたの

である。なお、二日後の二十日、義堂と古劍は、胡字の諸作につい

て説き明かし、義堂は数十字を改めている。義堂の詩は、『空華集』

巻第十に収録されている。古劍の詩に関しては、彼の詩文集である

『了幻集』にも見当たらない。

古劍新年試筆偈和(第二十韻)十首有レ叙

余少時耽レ詩。嘗在二関左一用二城雷峯三韻一為二八句詩一和二

答友人一者殆乎百篇。好事者雅為二詩戦一。逮二年稍長一鏡

氣銷磨。乃痛悔二前非一慎防二口業一不三復従二於戦事一矣。

会庚申春来二疊下二後三年。壬戌歳首一夕。忽被二東光古劍

老禅將以二胡字韻一為二突騎一。襲中我不備上。其鋒不レ可レ

当。而避レ之無レ計。窘不レ奈。掲レ竿為レ旗。刻レ蒿為レ矢。

三戦三北而乃降矣。遂収二其遺矢墮鏃一。東為二一包一奉レ

納。呵呵

甲子推窮到二大廻一。笑他水牯老二於圍一。相逢且問年多少。特

地休レ論法有圍。画餅充レ饑円レ似レ月。燃燈授記験同レ圍。伽

陀写出虚空紙。字字看来説不レ圍。

(三首省略)

上元座向二冥鐘圍。東壁隣光喜レ及レ圍。粗空千鏡従レ此統。油

餅一滴弗レ憂レ圍。詞章麗レ似二宜春帖一。号令嚴レ於二玉帳圍一。

莫レ放二神鋒一輕出上レ匣。邇来識レ劍少二風圍一。

(以下五首省略)

【注】「古劍」とは古劍妙快。

ここで注意したいのは、『日工集』永徳二年正月十八日条にも見られたが、義堂が、古劍との詩の応酬を「詩戦」と表現(認識)し

ていたことである(⑪の詩題には、「意は文を以って戦ひを挑むに在り」と記されている)。序文の「たまたま庚申の春、犂下に來たりて後三年」以下の文章は、例えば古剣を「老禪將」に喩えていたりして、非常にユニークである。義堂が詩の唱和を、文学的遊戯として捉えていたことが端的に表われている。

先に挙げた「日工集」からの引用において、義堂と古剣の詩の応酬以外にも、「和韻」に関する記事は散見した。こうして見ると、詩の贈答や唱和は、禅林社会において日常的に行われており、「和韻」という行為は、社交の手段として半ば習慣的に、時として遊戯的に行われていたことが知られる(和韻詩の詩題にもよく「戲」字が見られる。⑨・⑭参照)。それ故、例えば、唱和の場などでも立ち振舞えるように、常日頃から義堂の許に和韻詩の添削を求めてやって来る禅僧や公家が跡を絶たなかったであろう(「日工集」貞治六年七月九日条、応安三年八月七日条、永徳元年十一月十三日条等参照)。

(II) 詩作の契機になる場合—(a)本韻詩が中国の詩人のもの
①【空華集】巻第六

二月二十四夜大雨。次早余病少間。偶閱唐高僧無可贈詩僧一。有下曰病多身又老。枕倦夜兼長。之句上。迷惑于心和其全篇一付待僧曰某者

誦之。曰

雨声喧竹屋。風響撼松園。幾夜吟欵枕。三春病臥園。
停レ鈕階草蔓。懶レ鑷額髭園。今古亡羊者。豈惟殺与園。
【本韻詩】【全唐詩】卷八百十三・無可一

贈詩僧一

寒山对水塘。一作レ廊。竹葉影侵園。洗レ藥水生岸。
開レ門月滿園。病多身又老。枕倦夜兼園。來謁吾曹者。
呈レ詩問否園。(明倫出版社印行。へ内は割注を示す)

②【空華集】巻第六

和皎然詩送中竺道者赴叡山受戒上并序
不背資章甫。勝衣被木園。今随秣陵信。欲
及蔡州園。梵寺鐘声遠。春山戒足園。歸來次第学。
応レ見後心園。此乃唐高僧雲之昼公。送志公沙弥赴
上元受戒上詩也。永和丙辰二月。小師中竺季十三。以
道者。自福山。将下赴比叡山。登壇受戒上也。特
來告レ辞。且需二錢詩一。則告レ之曰。夫登壇受戒。寔仏
祖之權輿。禪智之基本也。而邇季贗浮園之輩。冒レ名
竊レ服。辱二戒壇一者皆是也。汝其慎也哉。遂書二昼公詩
於前。步其韻於後。示為二受戒之資一云。
剪レ髮為童子。安レ名配法園。試経須レ得レ度。稟戒要レ

登_レ園。岳雪粘_レ鞣濕。江風掠_レ面園。青春看易_レ暮。海路莫_レ愁_レ園。

【注】「昼公」とは皎然（俗姓は謝、字は清昼）。

③【蕉堅莖】・「山居十五首次二禪月韻」（十五首）（三四）

【本韻詩】「禪月集」卷第二十三・「山居詩并序」（二十四首）

④【空華集】卷第一・「白書二夢山說後」

序文に「余既為二墨上人一作二夢山說」。後数月一日閉_レ戸午睡。

睡中有_レ若_下人引_レ余徑_上半雲旧隱。盤_中桓乎烟霏空翠間上。

忽聽_二剝啄_一。覺而眠_レ之。乃夢山上人也。手_二茲卷_一求_レ書_レ後。拭_二睡目_一和_二蘇詩_一。以填_レ之曰。「とある。

【本韻詩】「蘇軾詩集」卷二十三・「初入二廬山_一三首」

⑤【空華集】卷第九・「謝_三永相山惠_二扇面蘇李泣別圖_一次元朝

楊氏贊韻」

①、②は詩の全文、③、④、⑤は詩題と序文のみを掲げた。①の【空華集】巻第六からの引用に注目する。序文によると、ある年の二月二十四日夜、外は大雨が降っていた。翌朝、義堂は少しく病気が癒えた。偶々唐の高僧である無可の「詩僧に贈る」詩を目にして、「病

多くして、身も又老ゆ。枕に倦みて、夜兼ねて長し」の句に感じ入り、その詩全編（①）【本韻詩】参照）に和して、侍僧に誦せしめたという。義堂の詩には、「幾夜吟じて、枕を_{そだ}歛つ。三春病んで、_{そだ}床に臥す」という句が見受けられる。

芳賀幸四郎氏「中世禪林の学問および文学に関する研究」（日本学術振興会、昭三一）などを見ても、当時の禪僧が多くの漢籍に精通していたことが知られる。彼らはある作品と対峙して、その作品内容に共感し、興に乗じた時、詩を詠出していたと思われる。「翰林五鳳集」巻第五十八、六十一の支那人名部には、「くヲ読ム」という詩が散見する。

・「読_二伯夷伝_一」（巻第五十八、江西・三益）

・「読_二宋玉風賦_一」（同右、琴叔・梅陽）

・「読_二逍遙遊篇_一」（同右、琴叔）

・「読_二金銅仙人辭漢歌_一」（巻第五十九、心田・琴叔）

・「読_二孔明出師表_一」（同右、春沢・熙春）

・「読_二蘭亭記_一」（同右、蘭坡）

・「読_二淵明婦去來辭_一」（同右、瑞溪・月舟・村庵）

・「読_二李白清平調詞_一」（巻第六十、瑞岩・万里・月舟・仁如・天隱・蘭坡）

・「読_二杜甫洗馬行_一」（同右、春沢）

・「読_二杜牧集_一」（同右、絶海）

・「説」東坡試院煎茶詩一（卷第六十一、瑞岩・春沢）

・「説」和靖詩一（同右、南江）

したがって、このような状況で和韻詩を作成した場合、その詠作内容は、おのずから本韻詩と同趣のものになってしまふ。それは②に關しても同様で、義堂は永和二年（一三三六）二月、唐の高僧である皎然の「至洪沙弥の上元に赴きて受戒するを送る」詩に和して、中竺道者が比叡山に赴いて受戒するのを送っている。ちなみに「日工集」応安元年（一三六八）十二月廿八日条によると、義堂はこの日、諸子のために皎然詩を講じ終えたという。

(b) 本韻詩が先輩借のもの

①「空華集」巻第五

同「諸友」和「禪居詩」題「三嶋廟亭壁」并叙

信毎歎「生晚不」及「識」禪居師一。故游「名山勝槩」一。得「見」其遺題一。則雖「片言隻字」一。皆収而主レ之。丁未秋九月。予及福鹿阿山諸友。志「諸古」者若干人。偕登「斯亭」一。拜「觀禪師泊諸老倡和之什」一。想「見前朝人物之盛」一。乃厲「同遊者」一庶歌。以告「後來君子」一。庶乎繼「述厥美」一云
禪居妙偈筆通「圖」。滿壁龍飛霧雨「圖」。後四十年滄海變。山神猶護「旧氈圍」一。

禪居和尚題「三島廟壁」偈附

瀬戸行宮古殿「圖」。魚龍舞「浪海風圍」。浙江亭上多「疑似」一。隔「岸越山相對圍」。

【注】「禪居」とは清拙正澄。

②「空華集」巻第九

題「温泉広濟接待菴」并叙

応安甲寅春。余以「湯医」与「九峰禪師」会「于斯菴」一。一日九峰出「故梅洲老人旧題及自和者」一。命「余泊同遊者」和レ之。後四年戊午春。九峰主「於正統」一。余尸「黄梅」一。隣牆往反話及「温泉旧遊」一。遂探「諸故紙中」得「其旧藁」一。假「筆適用中」書「版而刊レ之」。九峰師レ之曰。劍已去矣。子尚刻「舟何也」。余笑而不「答」。遂書為「レ叙」。

中宵夢破響浪「圍」。応「是巖根涌」熱「圍」一。算笈伝「泉煙遶」屋。家家具「浴客賒」圍。海涯地暖冬無「雪」。山路天寒午踏「圍」。遠嶼朦朧雲霧黑。江潮送「月落」微「圍」一。梅州
山開「三面」一滄「圍」。上有「三靈神」推走「圍」。潮怒雷声高「曉枕」一。沙堆雪色護「雲圍」一。青松「一樹何年暮」。紅葉「千林昨夜圍」。勝槩無「詩收拾尽」。多情遠客「軼着圍」一。九峰
温泉乱浴汗淋「圍」。接得知消「幾杓圍」一。宿客每分「爇店榻」。詩人偏愛「餐公園」。陶「成什器」輕「於」レ「土」。煮「出官塩」白「似」レ「圍」。暫借「僧窓」同「遠眺」一。東南目断「水茫圍」一。

【注】「九峰禪師」とは九峰信虔、「梅洲(州)老人」とは中巖円月、「遵用中」とは用中昌遵。中巖の詩は、「東海一漚集」一に「熱海」と題して収録されている。

③【蕉堅菓】・「次韻壺隱亭」(六三三)

【参照】「空華集」卷第八・「留題能叟居士壺隱亭二首」

④【絶海録】卷下・「永徳壬戌春清白寺賞花。謹奉追和先國師韻」(一九三)

⑤【絶海録】卷下・「次韻飾月軒」(一九四)

【参照】「空華集」卷第四・「追和飾月軒旧韻」。賀臨川古劍二、「了幻集」(古劍妙快著)・「建武甲戌歳 吾先國師憩乎臨川之日。栽竹於東軒。軒扁飾月」。説「偈賞」焉。從而和者。凡三十有四人。皆江湖英衲。卓犖瑰偉之士也。後四十年。庚申夏。予來在此。數下其人。之在「于今」者上。不_レ過三四輩_二爾。掩_レ卷浩嘆不_レ已。而此君固自若也。追和_二厥韻_一。聊寄_二仰慕之意_一。且記_二歲月_一云。

①、②は詩の全文、③、⑤は詩題のみを掲げた。①の「空華集」卷第五からの引用に注目する。「禪居師」とは中国渡來僧の清拙正

澄(一二七四〜一三三九)のことである。序文によると、義堂は遅く生まれたため、清拙と面識がなく、そのことを常々嘆いていた。それ故に名山や勝景を訪れ、清拙の遺題を発見すると、それがたとえ片言隻字であっても、すべて手に入れて宝物にしていたという。貞治六年(一三六七)秋、義堂は、建長寺や円覚寺の諸友等とともに三島廟(三島大社、静岡原三島市大宮町)の四阿に登り、清拙や諸老の唱和詩を拝観して、前代の人々の盛んな様子を想像した。そして、同遊の者たちとその詩に唱和し、後世の人々に、眼前の美しさを語り継ごうとした。「五山文学新集」別卷一には「詩軸集成」があり、「三嶋廟亭詩」(東福寺靈雲院藏の「亀鑑集」という古写本の雑録の中に在る)も収められている。これによると、清拙が同廟に遊んだのは元徳元年(一二三九)春、義堂がこの詩軸を作成したのは応安二年(一三六九)秋七月朔のことである。こうして見ると、禪僧が名勝地や寺院の境致、塔頭、寮舎などを訪れた際、風景の素晴らしさや古跡(旧跡)の奥床しさ、以前に同地を訪れ、詩を吟詠した先輩僧に対する尊敬の念などが相俟って、彼らをして和韻せしめていたと言えようか。義堂の詩には、「禪居の妙偈、筆、靈に通ず」という句も見受けられる。

②は、義堂が応安七年(一三七四)二月十八日に、湯治先の熱海広濟庵で中巖円月(一二三〇〜七五)の旧題に和したものである(「日工集」)。ここでは、同じく中巖の詩に和した九峰信虔のもの

同様、主として眼前の風景が詠じられているようである。

なお、つぎのような用例もある。【空華集】巻第七に「次韻春屋首座四十首」という詩があり、その序文には、

辛卯春。吾兄春屋首座有二病中作^一。同病諸公遞相庚和。或五首。或十首。乃至三十首。愈出愈奇。一時之盛作也。周信亦効^二其響^一。凡四十首。此内或贈答。或時事。或題詠。或紀行。余時有^三温泉之行^一。遂及^レ之云。

と記されている。これによると、春屋妙葩（一三一—一八八）には、観応二年（一三五一）春に病中の作（虫字韻）があり、同じ病氣に罹った諸公と、或いは五首、或いは十首、乃至一、三十首、互いに相庚和したという。義堂もそれにならって、機会を別にして四十首も次韻したのだが、その詠作内容は、贈答、時事、題詠等と多岐に渡っており、病中の作から離れていることも注目されよう。

(C) 本韻詩が自身の旧作

①【空華集】巻第四

人日過^一亀山^一訪^二無求首座^一不^レ値。追和^一旧韻^一
留^二題屋壁^一

人日尋^レ人不^レ在^レ圃。童兒一笑指^二他圃^一。梅花处处開^レ應^レ遍。

不^二是雲間^一即水圃。

【注】「無求首座」とは無求周仲。

【本韻詩】「空華集」巻第四

仏成道日送^二無求首座^一歸^二西山^一。

瞿曇曾出雪中圃。首座今歸雪外圃。等是^レ應^レ難^レ忘^レ熟處。陸州房在^二方松圃^一。

②【空華集】巻第二「十八日府命屢至再歸瑞泉自和旧偈」

【本韻詩】「空華集」巻第二「巳酉二月十三日因^レ事謝^二事瑞泉^一有^レ偈留^二別道人^一」

③【空華集】巻第八「癸卯分歲自和前韻」

【本韻詩】「空華集」巻第八「謝^二東谷西堂^一惠^レ柑^一」

【参照】「空華集」巻第八「甲辰歲旦試^レ筆併^二前和^一答^二向陽谷^一」

【注】「用^二柑字韻^一詠^レ雪」、「人日偶讀^二杜詩^一有^レ感復用^二前韻^一呈^二陽谷^一」

①は詩の全文、②、③は詩題のみを掲げた。①は【空華集】巻第四からの引用である。この詩の、より詳しい詠出経緯は、【日工集】で知ることができる。

七日、赴^二西山^一、三会・雲居上香展拜、兩院主・臨川・天龍方丈人事、次過^二無求房^一、々主它之、因用^二旧韻山字^一作^レ詩、留^二付惠珙童子^一、即絶海度弟也、候^二無求婦^一呈似、詩曰、人

日尋レ人不レ在^{〔見〕}レ^{〔四〕}、童子一笑指^{〔他〕}レ^{〔四〕}、梅花処々開^{〔遍〕}レ^{〔遍〕}。

不^{〔是〕}レ^{〔雲〕}團^{〔一〕}即水間、楷中和^{〔二〕}山字^{〔一〕}曰、北斗維南有^{〔此〕}團^{〔一〕}、崢嶸秀氣^{〔丘〕}群^{〔四〕}、陽崖多產玉芝草、雨露恩從^{〔霄漢〕}團^{〔一〕}、(下略)

(永徳三年正月七日条)

【注】「無求」とは無求周仲、「恵瑛童子」とは元璞恵瑛、「楷中」とは楷中^{〔模〕}。

永徳三年(一三三三)正月七日、義堂は、西山の臨川寺や天龍寺を挨拶回りにしたついでに、無求周仲を訪ねたが、あいにく不在だった。よって、旧韻の山字「日工集」によると、前年の十二月八日(仏成道日)に無求が西山に帰るのを送って作った自身の偈(①)「本韻詩」(参照)の韻を用いて、この詩を作り、絶海の徒弟である元璞恵瑛に預けておいたという。両詩の内容面での関わりは、それ程なないように思われる。

○ 補足

この章を終えるに当たって、論の進行とは別に、気付いたことを四点、以下に述べておきたい。

第一点は、禪僧が韻に和(次)す時の意識について、である。

(I) ③で義堂は、観中の詩一首に次韻して、二首詩を作っている。

また、(II) (a) ③で絶海は、禅月大師(徳隠貫休、八三三〜九一

二)の山居二十四首のうちの十五首に次韻している。この他、「空

華集」には「次^{〔韻〕}答^{〔敵〕}密室^{〔劍〕}南江^{〔七〕}首」詩(卷第三)や、「和^{〔三〕}立^{〔季〕}成^{〔再〕}住^{〔二〕}信陽安國^{〔四〕}首」詩(卷第五)があり、前者は、結句の韻字が「盃」字四首と「風」字三首、後者は、結句の韻字が「來」字三首と「幽」字一首から成っている。それぞれ本韻詩は未詳であるが、前者は盃字韻一首と風字韻一首の計二首、後者は來字韻一首と幽字韻一首の計二首と推測される。以上のことから、彼らは、かなりアットランダムに韻字を選んで、詩を詠作していたのではないか、と思う。

第二点は、幼童や少年僧との詩の唱和に関して、である。「蕉堅藁」には、(I) ⑥に挙げた「允修小生の歳旦の韻に次す」詩(一二七)の他にも、「人日、劍童の韻に和す」詩(一二三)や「霽童の韻に和す」詩(一二三)があり、幼童や少年僧との唱和詩を確認することができる。「空華集」には見当たらない。「日工集」には、義堂が少年僧の作品(試筆詩)を添削したり、少年僧に詩作を促す記事が見受けられる。永徳二年正月一日条、同五日条、嘉慶二年正月二日条等参照)。

室町時代の後期になると、禅林社会では、試筆詩やその代作詩、唱和詩が盛んに作られるようになった(横川景三(一四二九〜九三三)や景徐周麟(一四四〇〜一五一八)の作品集には、試筆代作詩や唱和詩がよく見られる)。元来、試筆詩は誰でも製することができたのだが(I)で引用した「日工集」永徳二年正月十一日条で

は、古劍が製した試筆詩に対して、そこに居合わせた者が唱和詩で応えている）、この頃になると、主として幼童や少年僧によつて製せられるようになった。幼童や少年僧が独力で作詩することが不可能な場合は、師僧が代わつて作つたという。¹⁰⁾これらのことを勘案して、稿者は「蕉堅藁」に試筆唱和詩、見方をかえれば艶詩の濫觴（萌芽）を認めたいと考えている。

第三点は「前韻二和ス」という表現について。この場合の「前韻」とは、作品集において、当該詩の直前に位置する詩の韻を意味するのではない。例えば、(Ⅰ)⑮に挙げた「空華集」巻第十所収の「次レ韻答二明室」并叙詩の序文には、「重ねて前韻を用ひて」とある。この詩の八句目の韻字は、「鑑」であるが、鑑字韻は、当該詩よりも三、四首前に、二首並んでいる。(Ⅰ)⑮「本韻詩」参照。要するに、「前韻」とは、唱和の場において、当該詩を詠出する以前に自身（もしくは他者）が詠んだ詩の韻を意味するのであろう。第四点は「一字韻二和ス」という表現について。(Ⅰ)で引用した「日工集」永徳二年正月十一日・廿日条には、「胡字八句に和す」とか「胡字三首に連和す」とあり、「胡字」とは七言律詩の八句目の韻字を指している。また、(Ⅱ)(C)で引用した「日工集」永徳三年正月七日条には、「因りて旧韻山字を用ひて詩を作り」とあり、「旧韻山字」とは七言絶句の一句目もしくは二句目の韻字を指している。「空華集」全体に目を配ると、「和」類字韻「与」論寂真」詩

(巻第八)、「重」和昏字韻「酬」海東暉」詩(同上)、「和」朋字韻「答」芥然上人村居」云二首」詩(同上)では、「類」「昏」「朋」字はすべて、八句目の韻字に用いられている。また、「春日和」素中秋字二」詩(巻第二)で「秋」字は二句目、「復用」橋字韻「寄」陽谷義山二上人」詩(巻第八)で「橋」字は四句目、「用」柑字韻「詠」雪」詩(同上)で「柑」字は一句目にそれぞれ用いられている。以上のことから、一般的に「A字韻二和ス」と言えば、絶句ならば四句目(結局)、律詩ならば八句目の韻字が「A」字である詩に和(次)したように考えがちであるが、現実には必ずしもそうではないように思われる。

おわりに

以上、絶海と義堂の和韻詩の詠作状況を、大まかに分類した。詩によっては曖昧なものも存するが、数量的には「(Ⅰ)贈答・唱和にともなう場合」が圧倒的に多く、ここに、五山禅僧の、いわゆる「同社」「友社」の繋がりと、その中で詩作に興じる彼らの有様とを見ることができよう。彼らは、中国において「和韻」が否定される向きがあることを知っていながらも、やはり沸き立つ衝動を自制し難かったのだらう。義堂の詩の半数が和韻詩だったのは、彼が当時、禅林社会の中核的な役割を担っていたことも理由の一つとして挙げられると思う。夢窓疎石(一一七五―一三五二)や春屋に和韻

詩が多いことも、同様の理由で説明できるだろう（意外と思われるのが、あの一休宗純〔一三九四〜一四八一〕に和韻詩が極端に少ないことである。この事實は、これまでの一休像を見直す契機になるかも知れない。伊藤敏子氏編「考異狂雲集」に二例のみ）。作品解釈が大雑把であるため、五山禅僧の禅心や悟境の交流までは捉え切れていないが、和韻詩の作成に、彼らの、文学活動へ傾斜する一面を、稿者は読み取りたいと思っている。

今回は、絶海と義堂の作品類を中心に、五山文学における和韻詩の様相を概観したが、残された問題は、大小様々である。例えば、大きいものでは、座の文学、特に聯句文芸との関連は、いずれ明らかになくはならないだろう。また、和韻詩が詩軸に纏められて行く過程などにも興味がある。吉川幸次郎氏は、福原麟太郎氏との共著「二都詩間」（新潮社、昭四六）の中で、中国詩の「一韻到底」という原則に関して「この外国人からは面倒そうに見える詩法を、本国の人には、所要の行き先と合致するパスを、町角で待っているほどの面倒としか感じさせないのではないか」（東への手紙・二三頁）と指摘されているが、やはり外国人である五山文学僧が詩を作成する際、最も苦しんだのが「韻」の問題であろう。そのことが「和韻」のどのあたりに影響しているか。これも今後、探ってみたいと思っている。

注

(1) 引用は辻善之助氏「空華日用工夫略集」（大洋社、昭一四）による。また、返り点は藤木英雄氏「訓注 空華日用工夫略集」（思文閣出版、昭五七）を参考にして、私に施した。

(2) 「五山文学全集」や「五山文学新集」を繕くと、以下のような用例が見られる。

○「空華集」卷第十二・「敬序」仏光師相留・題清見閑・唱和板首上

応安戊申。無二公。適主茲山。有二祖風烈。得名德和華真染

者若干篇。將附本韻一而板中刺之上。遂統乃韻。白題一板尾。

且空其右。以俟二後之隨レ得而填レ焉。（「五山文学全集」第二卷）

* * *

○「東海瓊華集」（惟肖得巖著）

梅屋以レ詩留別、歩レ韻奉レ寄、へ本韻詩云、堂上慈親髮已圓、

春未レ帰觀、揖驚圓、亦齋竹屋田園日、却可レ長安是故圓、

顏筋柳骨扶一風圓、十襲華牋字數圓、藥底新吟添一幾圓、江山信

美況吾圓、

（以下二首省略）（「五山文学新集」第二卷。へ）内は割注を不す）

(3) 引用は「五山文学全集」第二卷、詩の総数や作品番号は藤木氏「蕉堅藁全注」（清文堂、平一〇）による。また、返り点は藤木氏・前掲書、入矢義

高氏校注「五山文学集」（新日本古典文学大系48、岩波書店、平二）、梶谷宗忍氏「蕉堅藁 年譜」（相国寺、昭五〇）等を参考にして、私に施した。

(4) 引用は「大正新修大藏經」第八十卷、詩の総数や作品番号は梶谷氏「絶海語録」二二（昭五一）、思文閣出版）による。また、返り点は梶谷氏・前

掲書等を参考にして、私に施した。

(5) 引用や詩の総数は「五山文学全集」第二卷による。また、返り点も同書等を参考にして、私に施した。

(6) 原田稔氏「徐福の熊野来住とその日本古代文化に及ぼした影響」(「追手門学院大学文学部紀要」第三号、昭四四) 参照。

(7) 「詩戦」という語は、「日本国語大辞典 第二版」に「漢詩を応酬すること」と説明されている。「日工集」には他に二例ある(康安元年条、貞治元年夏条)。なお、「空華集」には、漢詩の応酬を「關鷄」に喩えている箇所がある(卷第十二「序」關鷄詩卷)。

(8) 本文中に「忽ち東光の古劍老禪將、胡字韻を以つて突騎と為して、我が不備を襲はる。其の鋒当たるべからずして、而も之を避くるに計無し」とあるが、これは「劉白唱和集解」(卷六十・230)の「彭城の劉夢得は詩の豪なる者なり。其の鋒森然として、敢へて当たる者少なし」という箇所を明らかに踏まえているだろう。三木雅博氏「平安朝における「劉白唱和集解」の享受をめぐって」(「白居易研究年報」第二号、平一三・五) 等参照。

(9) 藤木氏は「義堂周信」(日本漢詩人選集3、研文出版、平一一)において、同詩を「制作年代の最も早いものと見られるものは、『空華集』巻七の虫韻の七言律詩四〇首である」(一一頁)として、観応二年(一二三二)春、義堂が湯治のため、有馬温泉に向かった時の作とお考えのようだが、稿者もこの意見に賛成である。と、いうのも、「日工集」永徳元年三月三日条で、有馬温泉に赴いた義堂が、「詩を作りて旧を懐ふ。叙に云く、余、辛卯の歳(観応二年)、上巳を以て茲の山に遊ぶ。転脚の間、已に三十一年なり。云々」と往事を偲んでいるからである。また、次韻詩四十首中に「二月十六日、まさに温泉に赴かんとす。乱に因りていまだ逃げず。偶々此の作有り」詩(十七首目)や「乱後に興を遣る二首」詩(二十六、二十七首目)があるが、「乱」とは、具体的に言っていると、氏も指摘の如く、観応の擾乱(一二三〇―五二)のことを指すだろう。この年の二月二十六日、高師直は武庫川付近で、上杉能憲によって斬殺された

(「園大歴」等)。後詩に「乱後に」とあるのは、このことを踏まえてのことと思われる。四十首中には「上巳前の一日、武庫溪に宿して、亀山の諸友に寄す」詩(二十八首目)や、「武庫山に過ぐ」詩(二十九首目)も見られる。その他、「地動に因りて友人に答ふ」(二十五首目)という詩があるが、「皇年代略記」の「崇光院」項には、この年の二月十九日に京都に大地震があり、將軍塚が鳴動したことが記されている。

ただし、稿者は「機会を別に動した」という箇所を強調しておきたい。すなわち、その和韻状況は「(一)贈答・唱和にともなう場合」ではなく、本韻詩と詠作時期がずれる可能性がある、ということである。春屋詩と義堂詩の詠作時期は(偶々)近接していたものの、例えば、慈氏門派の竺闍瑞要(義堂―大基中建―竺闍)などは、義堂の寂後に、機会を別にして、義堂詩に和韻している。玉村竹二氏「五山禅僧伝記集成」(講談社、昭五八)の「竺闍瑞要」項には、以下のように記されている。

(竺闍は)南禅寺慈氏院の徒で、文明六年(一四七四)には、義堂が嘗て観応二年(一二三二)春、病臥中の法兄春屋妙葩の作の韻を和すること四十首(虫字の韻の七言律詩)があるのに、またその韻を和し、同時代の文筆僧・月建令諸・季弘大叔・太極・横川景三等をして、またその竺闍の韻の迫和の詩を製せしめ、太極は五十首の和韻を製したという。それを転装して、竺闍は大切に製成していたという。(二五八頁)

和韻詩の詠作時期を特定する際にも、注意を要する場合がある。

(10) 朝倉尚氏「禪林における試筆詩・試筆唱和詩について」(「国文学研究」第六十五号、昭四九・一一) 参照。

(11) 朝倉尚氏には「禪林聯句略史―義堂周信とその前後―」(「中世文学研究」第二十二号、平八・八。後に「抄物の世界と禪林の文学」(清文堂、平八)所収)というご論考がある。

【付記】

成稿後に内山精也氏に、蘇軾の次韻詩に関するご論考があるのを知った。「蘇軾次韻詩考」(『中国詩文論叢』第七集、昭六三・六)、
 「蘇軾次韻詩考序説—文学史上の意義を中心に—」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊・第一五集(文学・芸術学編)、平元・一)。氏によると、蘇軾は、現在伝わる詩の、約三分の一が次韻詩である(本韻詩が確認できるものに限る)。そして、それらを原篇(本韻詩、朝倉注)の提供者(作詩者)で分類すると、「A 同時代の他者から寄せられた原篇に次韻した作品」「B 過去に詠んだ自己の詩に自ら次韻した作品」「C 古人の詩に次韻した作品」に分けられ、特にB、C類は、蘇軾が新たに確立した次韻の形態らしい。

本稿では、日本中世の中でも異質な、禅林社会における和韻詩の様相を追ってきた。内山氏の言うB類やC類は、本稿においても確認できた。また、義堂の和韻詩は、総詩数の半分以上を占める。「空華集」には蘇軾の詩に和したものがあらし(第三章(Ⅱ)(3)④参照)、「日工集」には「東坡、海上に在りて、陶淵明詩に和す」(貞治六年八月八日参)というくだりも見受けられる。これらの現象は、いったい何を意味しているのだろうか。他日を期したい。

* * *

本稿は、第七十四回和漢比較文学会東部例会(平成十四年一月二十六日、於大東文化大学)における口頭発表を、加筆修正したものである。

—あさくら・ひとし、本学大学院博士課程後期在学—